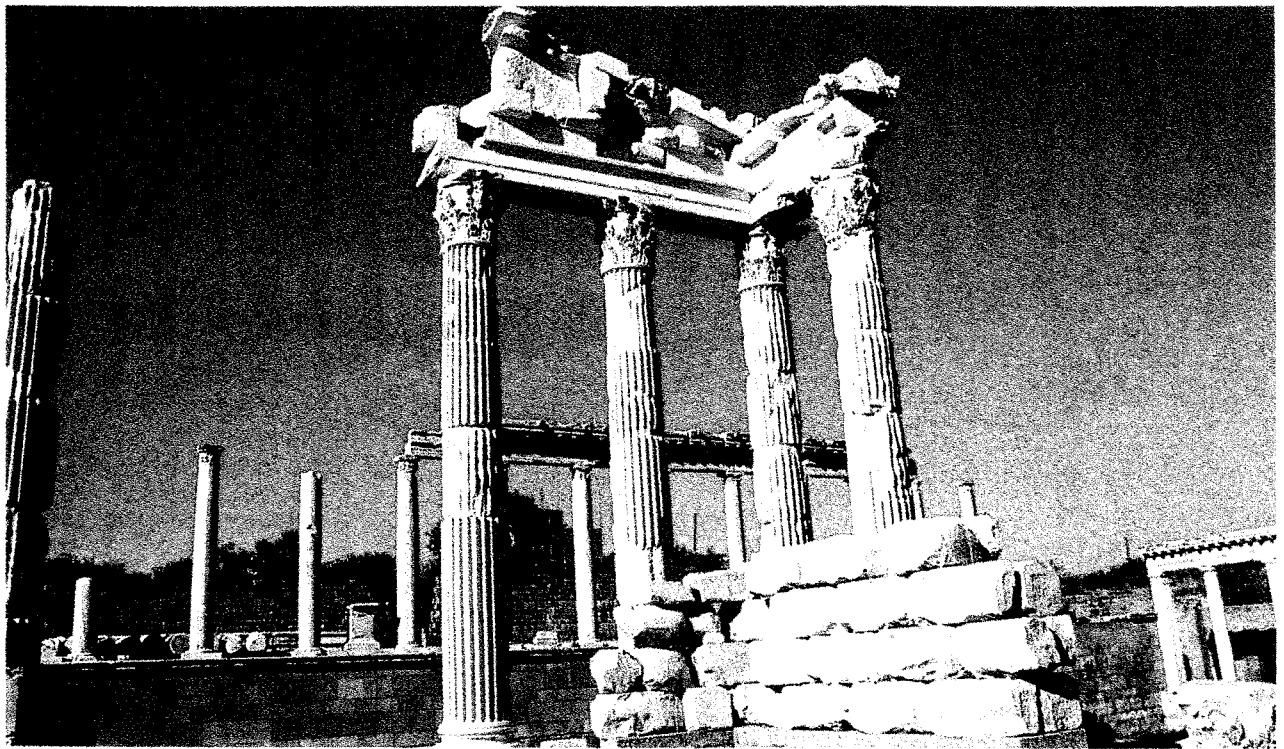


MERHABA=こんにちは

トルコに行ってきました。

2010年2月16日～2月24日



T ü r k i y e

編集 キンキンツアーリスト

時間と空間を結んでの旅

トルコに行ってきました（2010・2・16～2・24）

第1日目（2月16日 晴れ）

今回は、阪急トラピックスの「ビックリ仰天！トルコ9日間」（9日間で5つの世界遺産をめぐり、約10万円と破格の値段）に参加しました。

2月16日午後2時25分発のトルコ航空のイスタンブール直行便に乗ったのは、私たち7人のグループを含む総勢38人と添乗員の込山智加さん。日本との時差は7時間、狭い椅子での12時間の飛行はかなりきつい。機内食が2回出て、イスタンブール到着は午後8時で、各人は空港で両替をして（1TL＝トルコリラは約60円、2005年1月に通貨改革があり、それまでの100万TLが新しく、1TLになった）、ホテル、ホリデイ・インに着いたのは午後9時半頃。日本語の達者な現地ガイドのメフメットさんと運転手のイルハンさんが、空港で出迎えてくれたが、次の日は朝7時半出発なので、6時にモーニングコール、朝食の予定と聞いて、早々にベッドへ。

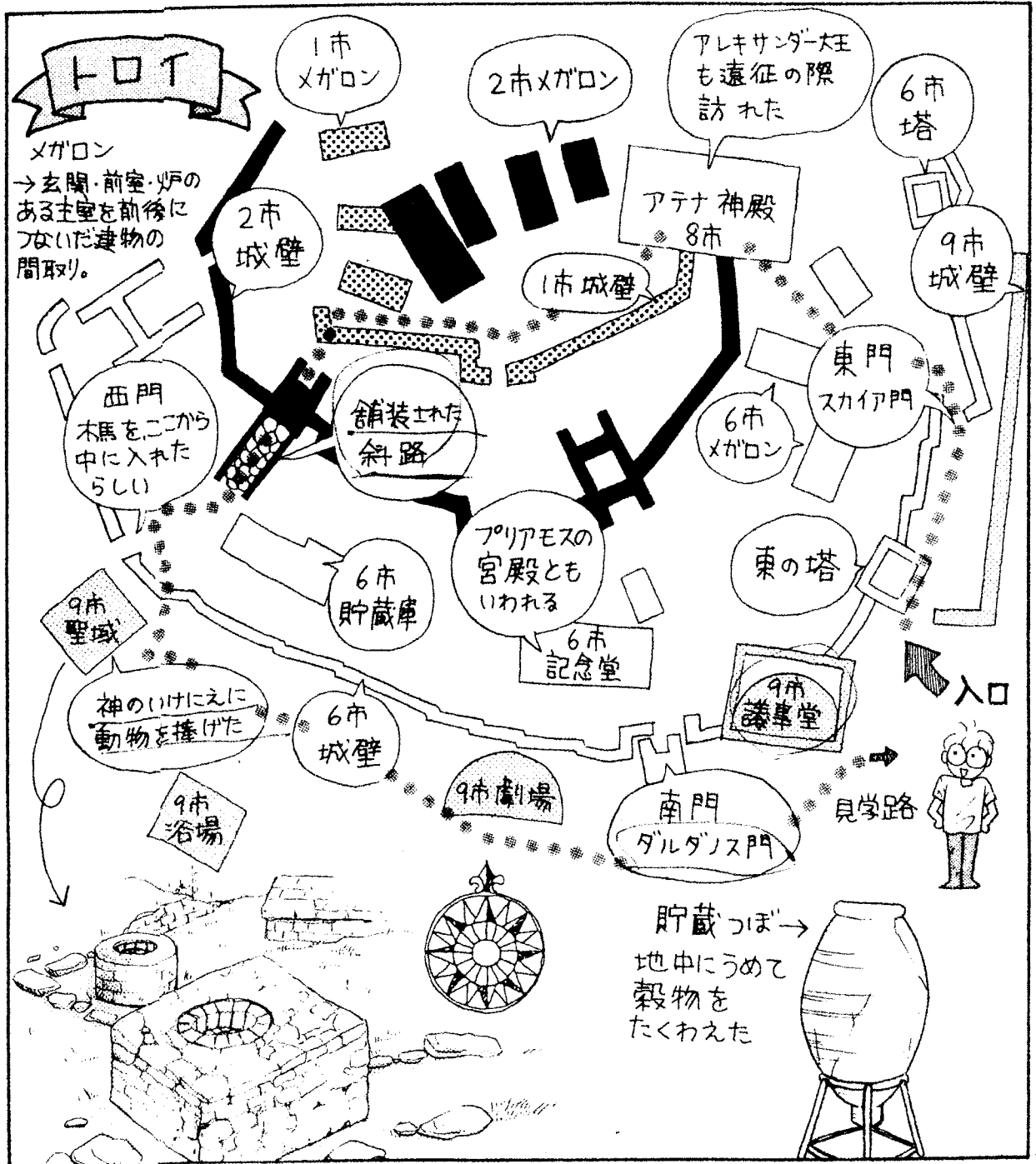
第2日目（2月17日 晴れ）

朝6時には、モスクのミナレットからのアーザン（礼拝の呼び掛け）の太い声が周囲に響き、イスラムの国に来たことを実感させられる。ホテルのバイキングでは、名物のゴマパンや甘いライスプディング、そしてザクロのジュース等もおいしかった。

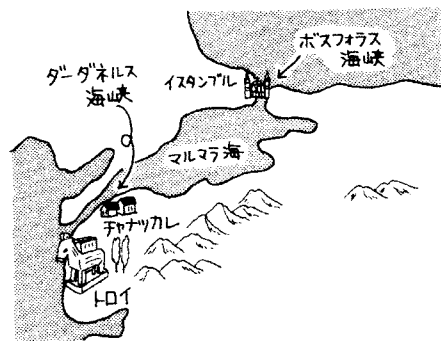
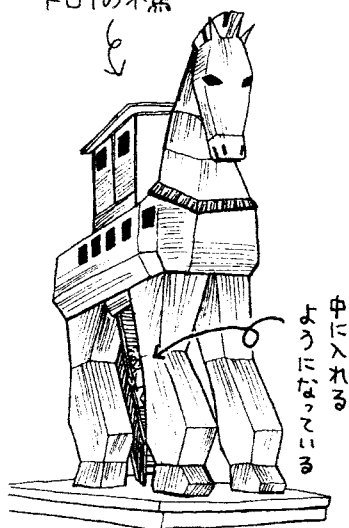
バスで約345kmを、6時間50分かけてトロイに向けて出発する。驚いたことに運転手と現地ガイドは「メルハバ＝こんにちは」と言って、頬と頬を合わせる。これは、同性同士の親愛の情を示すしぐさだ。マルマラ海と地中海を結ぶダーダネルス海峡に面した小さな港町－ラクセキに着き、昼食後その街を散策する。貴金属の店や土産品を売る店も建ち並び、瀟洒なモスクにミナレットが建っている。狭い幅の道にリヤカーを引いて小鯛を売り歩いている老人がいた。フェリー乗り場では魚屋さんが立ち並び、焼き魚を食べていた客もいた。風が強くてどんよりとした日だけど、浜辺に立つアタチェルクの像に見送られ、ダーダネルス海峡をバスと一緒に、フェリーでヨーロッパ側からアジア側に上陸。アジア圏とヨーロッパ圏という2つの文化圏を持つのはトルコだけだ。

トロイに向け広大な草原を左右に見ながらひたすら走る。オリーブの畑が続き、大地には、麦の芽が青々と生え、山の斜面には、ヒツジの群れが見られ、牧歌的風景をいたるところで楽しむことができた。日本のような農家の点在はなく、モスクを中心とした集落が形成されている。バスは、平坦な真っ直ぐな道を、高速道路並みに70キロから90キロで走る。市街地に入ると信号はあるが渋滞はない。国内は、携帯電話が普及し、中継アンテナが数Km毎にある。

午後2時半頃にトロイに到着（地図参照）。



遺跡の入口に置かれた
トロイの木馬



19世紀にドイツ人シュリーマンが発見したトロイ（彼は、その発掘した財宝をドイツに持ち帰った）が繁栄したのは、紀元前3千年というから今から約5千年前のことで、ホメロスの叙事詩「イーリアス」の「トロイ戦争」の舞台として有名。トロイの王子がスパルタの王妃ヘレネと共に通ったといわれる城門や、ローマ時代の野外劇場、古代の儀式の跡などがあり、エーゲ海交易の中心地として3千数百年間にわたる繁栄と衰退を繰り返し、ギリシャとのトロイ戦争を経て滅亡したトロイ。

入口には巨大な木馬の複製品（1975年建造）が置かれているが、かえって歴史の重みを感じられない。今は9層にもわたる遺跡群（同じ処に、年代順に第1都市から第9都市までの遺跡が重なっている）として世界遺産となっている。都市の跡は何層にも重なっている地味な遺跡なので、壮大とか圧巻という言葉が当てはまらなく、見て楽しむよりも、イメージを膨らませ、過去に思いをはせる。遺跡の近くにはアーモンドの白い花が咲き、そこだけが息づいているようだ。そして、遺跡の周りには、いたるところに短冊が置いてあるが、イスラム教特有の施しの精神により住民たちは、猫を特別視せず、普通の住民として接している。日本のように「猫にエサを上げないでください」ということではなく、大事にされ、猫はやさしい表情で観光客にもなついてくる。

その後エーゲ海沿いに約150Km、アイワルクに向かう。この日のホテル、アテミゼルホテルには、日本人のツアー客や韓国人、そして中国の旧正月で旅行に来て、日本人達は、はばかりことなくにぎやかに食事をしていた。

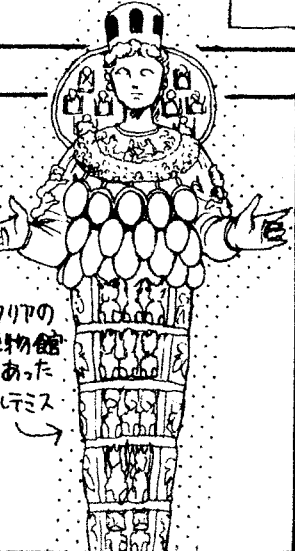
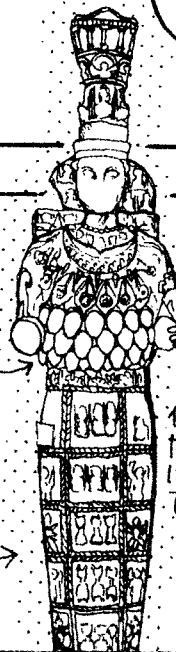
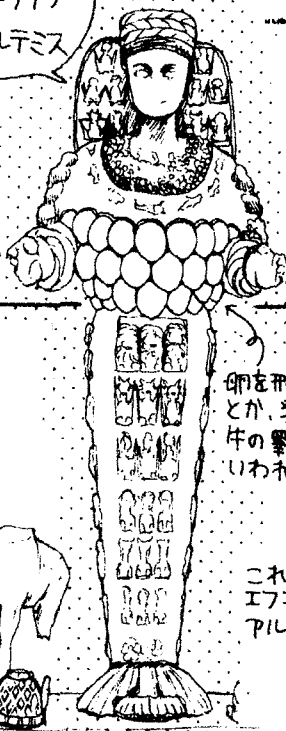
第3日目（2月18日 晴れ）

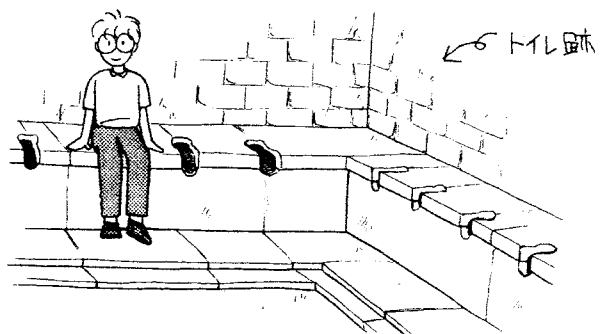
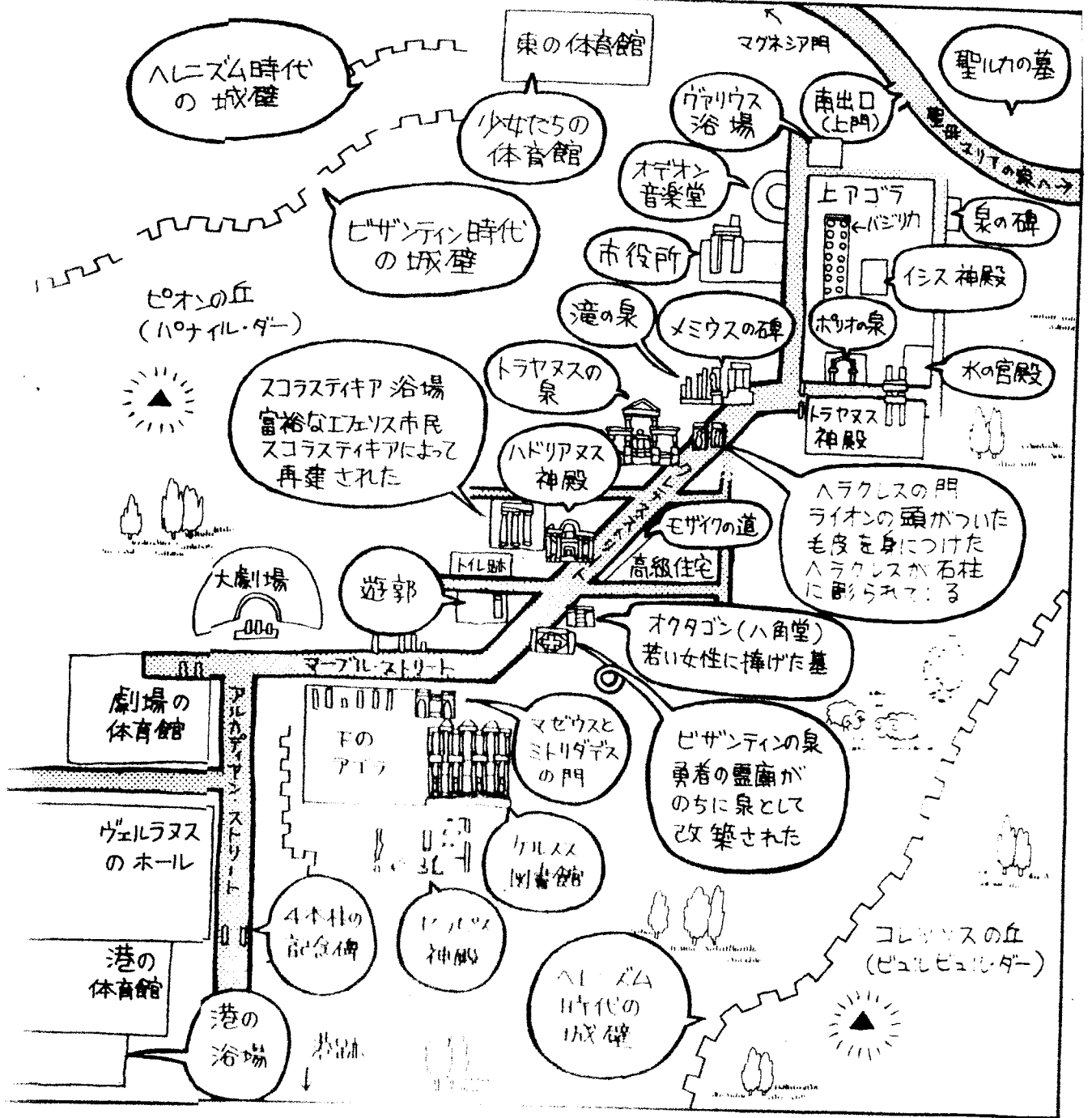
今日は、エーゲ海沿いを250Km南下し、小アジア最大の古代都市遺跡、エフェソスに向かう。途中トルコ石の店に立ち寄った。トルコ石とは、イラン産の石がトルコを通過することによって広められたので、トルコ石と呼ばれるようになったのだが、天然石と練り物との区別は難しいらしい。

午後、地中海最大の古代ローマの都市遺跡といわれるエフェソスに到着（[地区写真](#)）。オスマン帝国の末期にイギリス人考古学者によって発掘され、貴重な出土品の多くはイスタンブール博物館に保管されている。

エフェソスは紀元前11世紀に、ギリシャからイオニア人が移住して建設、アルテミス崇拝で有名な現存するギリシャ文明最大の遺跡。エフェソスはヘレニズム都市として栄えたが、紀元前2世紀には共和制ローマ帝国の支配下に入り、地中海交易の中心地だったが、現在残る遺跡はローマ時代に建てられたものである。その繁栄は、山側から流れ込む土砂の堆積に寄り港が縮小され、アラブ人たちの襲撃も強まり、8世紀には東ローマ帝国が放棄するまで続いた。

最初に見たのは、「アルテミス神殿跡」で、石柱が1本（その頂でコウノトリが子育てをしていた）と彫像の台座らしきものが残っているだけだったが、これは、ギザのピラミッドなど「古代世界の7不思議」の一つといわれている巨大建造物の一つ。紀元前7世紀に





建設が始まり、120年かけて、高さ19m、直径1,2mの石柱が127本並ぶ壮大なものとして完成したが、紀元120年に破壊され、6世紀にはこの大理石は石材として他所に持ち出されてしまった。アルテミス像は、黄金や宝石で覆われていたそうで、豊穡を表す神として沢山の乳房を付けた女神として表現されているという。これは、近くのエフェソス考古学博物館に収蔵されている。

「アゴラ」とは、古代ギリシャ社会で、市民の政治、経済の中心をなした広場の事をいう。エフェソス都市遺跡の「国営アゴラ」といわれるところは、収容人数が1400人で、集会や宗教祭事、取引などにつかわれていたという。最盛期には25万人の古代都市を支えた古代都市の市庁舎跡の柱には法律が刻まれており、神殿の門や彫像の台座には神々が浮き彫りにされていた。ローマ帝国内で有数の都市だっただけに、楽しく快適に生活していく上での設備は全部整っており、近代の都市のインフラとさほど差がないことに驚く。

面白かったのは公衆トイレの遺跡で、当時は隣の人との仕切りはなく、ベンチ式の大石の穴に腰をかけ、並んで用をたしていたようです。そして便器の下には水が流れ、目の前にはお尻を洗うための水の流れもあり、今日のウォシュレットの原型を見た思い。(なおこの方式は、現在もトルコのホテルでも採用されていたが、日本人には使いづらい)

また、壮大なセルシウス図書館はエフェソス古代都市遺跡の象徴といわれており、歴史的、芸術的価値が高く評価され、当時12,000巻のパピルスの蔵書があったといわれている。図書館と道を隔てて娼婦の館があり、地下では通路でつながっていた。山の傾斜を利用して造られた大野外劇場は、24,000人の観客席があり、音響効果も考えられて、今でもマイクなしで声を通るように設計されていた。当時のメインストリートは、大理石のモザイクの歩道が港まで続き、上流社会の人しか歩けなかったという。クレオパトラや哲学者ヘラクレイトスも歩いた道に、足裏を重ねることはひとしお感慨深いものがあった。

このエフェソフの街角(シナゴーク)では、パウロやヨハネが説教したのではないかと思う。ここから6キロ離れた山の中に聖ヨハネが、聖母マリヤとマグダラのマリヤを伴い、やって来て、ここで聖母マリヤは余生をおくつたとされている。その後、皮革製品の店に立ち寄り、紙のような薄い子羊の皮でできた上着に魅了された。

バスでの移動の際、現地ガイドのメフメットさん(彼の属する現地のツアー会社=DO RAK社はトルコでは最大の規模の会社で、自前の観光バスを多数持ち、日本語ガイドだけでも100人以上を擁している。彼は、アンカラ大学日本語科卒業、35才、ハンサムで独身)が、トルコの概況を話してくれた。

トルコという国、トルコ人とは、

トルコの面積は78万km²で、日本の2,5倍の広さに、7千5百万人の人が住んでいる。ヨーロッパの東のはずれのイスタンブールからボスポラス海峡をはさんで、アジアのアナトリア半島(アナトリアとは、ギリシャ語で『日、出づる国』という意味で、小アジアと

も呼ばれている)の地域で、国の東端はチグリス川・ユーフラテス川の源流であり、黒海の箱舟が降りたというアララト山(5166m)もある。国内には多くの断層がある地帯であり、10年前にはイスタンブールで、またつい先日も東部で大きな地震があった。

首都はアンカラ、公用語はトルコ語(アタチュルクがトルコを建国した時に、アラビア語を廃して、29文字のアルファベットによるトルコ語を制定)。トルコ民族は、元来、モンゴル高原を中心とする遊牧民族で、6世紀頃に「突厥帝国」を建国し、11世紀頃に現在のトルコの地(アナトリア半島地方)に、イスラム教徒のトルコ人が流入、混血しながら定着し、その中の王国の一つが、セルジューク・トルコ(1037-1157、首都コンヤ)であり、オスマン・トルコ(1453-1922、首都はイスタンブール)である。古来より多くの民族が往来してきた要衝の地で複雑な混血と混住の歴史を繰り返してきた多民族国家である。

オスマン・トルコ帝国は、東はアゼルバイジャンから西はモロッコ、南はイエメンまでの広大な地域を支配した。そして、第1次世界大戦では、ドイツ側で戦い、敗北。その後にムスタファ・ケマル(アタチュルク)の下でギリシャなどの戦勝国側と独立戦争を戦い、現在のトルコ共和国(1923-、首都はアンカラ)を建国、今日に至っている。アタチュルクの銅像がいたるところにあり、国民は彼を心から敬愛している。

優性遺伝のせいかな、街で見かけるトルコ人は、いずれも体格がよく、彫りの深い美男美女が多い。サッカーは国民的なスポーツとして人気があり、毎日、新聞を賑わしている。また、大変親日的で、「日本人は好きだ」と日本語で観光客に気軽に話しかけてくる。

それには理由がある。今の日本人にはあまり知られていないが、トルコの教科書に今も載っているエルトールル号の遭難の話「1890年和歌山県串本沖で、台風のため遭難(司令官を始め約590名が死亡・行方不明)したオスマン・トルコの軍艦エルトールル号から村人が命を掛けて、69名の乗組員を救助し、天皇は直ちに医者、看護婦を派遣し、全国からの弔慰金と共に翌年、軍艦でトルコに送り届けた」は、トルコの人なら誰でも知っている。そして、1985年のイラン・イラク戦争の最中には、イランのテヘラン空港に避難のため集結した日本人215名全員を、トルコ航空が日本に運んでくれた。その背景には、その時の駐日大使の尽力があったが、彼は小学校の時にエルトールル号の遭難の時の日本人の献身的な活動を学んでいたからだった。

トルコ料理は、世界の3大料理といわれているが、その香辛料は独特である。シシケバブ(ヒツジの肉の串焼き)、ドネルケバブ(薄切りの肉を重ね、長い串に刺して回しながら横から火を当て、焼けたところをそいで食べる)、ヤブラックドルマス(ブドウの葉にピラフを詰めて蒸したもの、それにはトマトやピーマンも使われる)、シガラ・ボレイ(チーズ、卵の入ったトルコ風春巻き、たばこの形をイメージしている)などなど。豆のスープは、特においしかった。トルコ人は、ワインを飲まないが、ワインを蒸留し、アニスで香りをつけたラクは、アルコール度45度でも、多くの人に親しまれている。水で割ると白濁し、別名「ライオンのミルク」と言われている。私たちも、そのとりこになっただけ。日本では

市販されていないのは残念だが、トルコ料理店では飲むことができる。

トルコの国花はチューリップ。数千の品種があり、トルコが原産地。16世紀にヨーロッパに伝わりたちまち高い人気を得た。ブルーモスクのタイルもチューリップやカーネーションなどを描き、絨毯や陶器などにもイラスト化されている。

トルコ経済

工業は近代化されてきたが、絨毯や衣料品などの繊維産業、陶磁器等の軽工業が中心。近年、世界の大手自動車メーカーとの合弁事業が進められ、ヨーロッパ向けの輸出が大きな外貨獲得源になっている。私たちの乗ったバスは、前半は、三菱自動車製で、後半は、ベンツ社製でした。

農業人口は約40%だが、GDPは約15%だから「貧しい農村」と言われているが、広大な農地が広がり（ただ、大地主制が残っており農産物価格も極端に低く、国外への移民や都市部への人口流入が続いている）、政府の「食糧の確保は戦略問題」との立場から完全自給率を維持している。大規模農業方式の小麦やオリーブの畑（1億2千万本で、人口より多い）や、果樹園（イチジク、干しブドウ用のブドウ、杏、ヘーゼルナッツ、レンズ豆は世界1の生産量）が見渡す限り広がり、広大な放牧地にはヒツジやヤギがいたるところで放牧されている。イスラム教徒は、豚は食べない。

政府は巨額の債務を抱え、急速なインフレーションのもと、IMFプログラムを受け入れ、国民生活も困難を極めたが、2005年以降は、GNPの伸びは年5%と若干持ち直してきている。失業率は約10%だが、イスラム教徒の助け合う精神せいか、あまり物乞いや失業者は見かけなかった。

トルコの交通の中心は、旅客、貨物とも自動車輸送で、「オトガル」と呼ばれる長距離バスのターミナルを軸に多数の路線が運行されている。私たちのツアーも1週間で32時間かけて、バスで約2000Km（札幌から鹿児島までの日本列島縦断の距離）を走行し、鉄道で約1千Kmの旅だった。道路は、全国的にかなり整備されているが、自家用車は高価で、ガソリンも高いので（1リッター280円）あまり普及していない。農村部では馬車やトラクターを利用している。鉄道は、アンカラーイスタンブール間の新幹線は間もなく開通という段階のようで、まだ便も少ないようだった。

イスラム世界とトルコ

イスラム教が誕生したのは紀元610年頃、ムハンマド（マホメット）がユダヤ教やキリスト教の影響も受け、アラビア半島のメッカで、「唯一神アッラー」への絶対帰依を説くイスラム教を創始。イスラム教の教えは聖典クルアーン（コーラン）に詳しく示されているが、その根幹は六信と五行、すなわち6つの信仰箇条と5つの信仰行為から成り立っている。

六信とは、神、天使、啓典、来世、定命の六つであり、ムスリム（イスラム教に帰依する者）になろうとする人は、必ず証人の前で「アッラーのほかには神はなし」「ムハンマドは

神の使徒なり」と信仰告白を行うこととされている。また、五行とは、信仰告白、1日5回の礼拝、喜捨、断食（ラマダーン月には日の出から日没までの断食）、1生に一度はメッカへの巡礼の五つであり、このような行為を集団で行うことによりお互いの絆を認識し、一体感を高めている。そして、いつでも親戚や友達の訪問を歓迎し、お茶（チャイ）で、もてなすことを誇りにしている。チャイとは、紅茶を蒸して、お湯を注ぎ、小さなガラス容器で飲む。1日何度も飲み、会社にはチャイ係がいる。

現在、イスラム教は、中東から西アジアにかけて広がり、14億人のムスリムがいると推定されている。ムスリムは、イスラムの教えに基づき社会の公正を実現し不正を否定し、生活での品行を保ち欲望を抑え、あるべき社会の秩序を実現しようとするが、それは個人の信条や日常生活のみならず、政治の在り方まで及んでおり、信仰の共同体と国家が同一の政教一元論にたっている。

現在、トルコは、99%がムスリム（多くはスンニ派、穏健で、あまり戒律には拘っていない）であるが、1924年にオスマン・トルコ王朝を倒し、国父ケマル・パシャ（アタチュルク）先頭に、トルコ共和国を建国した時に、イスラム世界では、最も早く「政教分離」を掲げた。そして、西洋化による近代化を掲げ、1982年制定の憲法では3権分立が確立され、政党政治を基本とし、宗教の自由、男女平等などの民主的権利を保障している。外交面では西側社会の一員として1952年以来、NATO、OECDに加盟し、現在EUに加盟申請中である。（2005年から始まったEU加盟交渉が実現すれば、EU内での最大の国となる。イスタンブール空港ではユーロが使われていた）義務教育は8年、男子は100%の就学率だが、女子は、イスラムの「女性差別」（男女同席の否定や女子のスカーフ着用など）問題もあり非修学者もかなりいる。義務兵役制で、軍は国民の信頼も篤いといわれているが、度々政治に介入している。

第4日目（2月1日 晴れ）

今日は、世界遺産、綿の城という意味の「パムッカレ」の観光（地図参照）。石灰岩でできた地形は、遠くから見ると白い綿の花の城のように見えるのでこの名がついた。石灰の山は、テラスと呼ばれ、段々畑のような棚が連なり、そこに溜まった温泉水は空の色を受けて青色に変わったり、夕陽を映し黄金色に染まり、美しい情景を見せてくれる。私たちは、滑りやすい石灰棚に素足で入り、しばし足湯を楽しんだ。また、テラスは高台にあり、眼下に素晴らしい景色が広がる。近くにはクレオパトラも泳いだという温水プール（池）もあり、夏場はロシアからの観光客がプールを楽しみにやって来る。いまだプールの中には沢山の遺跡（石柱）が横たわっていた。

ヒエラポリスの遺跡は、パムッカレの石灰棚の一番上にあり、ローマ帝国の温泉保養地として栄えた。ローマ帝国時代にも地震で破壊された。その後復興したが、1354年の大地震で完全に廃墟と化す。紀元前2世紀頃の最盛期には人口10万人を超えたという。円形劇場、神殿跡の遺跡が残っているのみであるが、今も、発掘を進めている。



その後、約410Km、5時間半走り、11世紀から14世紀にかけてセルジューク・トルコや、ルーム・セルジュークの首都だったコンヤに到着。ここは、シルクロード沿いの街として発展し、全盛期には優秀な学者や芸術家が集められ、政治、文化、芸術の中心地として栄えた。今は、建設ラッシュに湧く98万の都市だ。

メブラーナ博物館を観光、当時の神学校が博物館となっている。中には緑のターバンのおかれた教師の棺、白いターバンのおかれた生徒の棺のほか、様々なコーラン、当時の勉強部屋や共同生活の台所や食卓などが展示されている。黄金の壁に囲まれた教祖の棺や、イスラム教の開祖マホメットのあごひげ、999個もの球を繋げた数珠などを見学。

メブラーナ教は、くるくる巡回しながら踊ることによって神と一体になれるという教えを持つイスラム神秘主義教団だが、円筒形の帽子にスカートといういでたちで、一心に踊る姿は幻想的。しかし、共和制政府になってから宗教活動は禁止になった。

その後カラタイ神学校を見学。今は、トルコには神学校という制度はないから、美しいモザイクタイルの博物館になっている。学校帰りの少年たちが日本からの観光客を歓迎して声をかけてくれ、旅の安全を祈ってくれた。これは、日本では考えられない光景だった。今晚は、ヨーロッパからの観光客を目当てに建てたバブル期の24階建ての超デラックスホテルに泊まる。設備は充実していて、プールやサウナ、ハمام（トルコの蒸し風呂）がある。早速ハمامに行く。大理石でできた内部は暖かい蒸気に包まれ、中央に少し高くなった大きな台が据え付けられており、そこに横たわると身体の芯まで温めることができる。

第5日目（2月20日 晴れ）

今日は、カッパドキアへ、約215Km走るが、その途中でキャラバンサライ＝隊商宿に寄る。そこは、塙で囲まれ、長旅に疲れた隊商を安全に休ませるために整備されており、それによってシルクロードによってもたらされる富を共有することができたという。

カッパドキアとは、首都アンカラを中心とする中央アナトリアの地域の大地をいう。この地域一帯は太古の時代に火山の噴火によって堆積した溶岩や火山灰が、長い年月の間に浸食されて硬い岩石部分だけが残り、出来た奇岩群は圧巻で、世界遺産に登録されている。

最初に地下都市カイマクルを見学、まるで蟻の巣のように地下に伸びる巨大な地下都市は、地下8階の深さで約1万5千人の人が1週間から10日ほど生活できたという。イスラム教徒の迫害から逃れるため、キリスト教徒が身を隠すために造られ、内部には、礼拝場のある教会もあり、ワインも造られていた。そして、このような地下都市は、十数か所あるという。

昼食は、洞窟レストランでマス料理を食べ、「妖精の煙突」といわれるキノコのような奇岩、ねじれた粘土の塊のような岩、煙突の上にベレー帽をのせたような岩など様々な奇岩をみる。三人の姉妹のようなスリーシスターズ、古くから修道士たちが住み信仰生活を送ってきた跡などを見学。

そして、途中、シルクの絨毯を手おりで織っているトルコ絨毯の店に寄る。トルコ絨毯

は、二重結びで裏と表が同じ柄で、100年経っても変わらない光沢の美しさと、使えば使えほどその良さがわかるという。トルコの女性は一生の宝として嫁入り道具として絨毯を持っていく。

その日は興味津々の洞窟ホテルに宿泊。地下三階までのホテルだが意外に快適、冬は暖かく夏は涼しいという。食事の内容も一番良かったのではないかと思われる。

第6日目（2月21日 晴れ）

ホテルを出発前に、無数のハトが岩穴に巣を作っている鳩の谷を見る。早朝にもかかわらずホテルの近くの道で、テーブルクロスを白いレース糸で細かに編みながら自分の品物を売りつける老女がいた。

今日は、「峡谷の城」という意味のボアズカレに向けて、約240kmを走る。途中、セラミック（陶器）の店に寄る。トルコの陶器は15世紀から16世紀のオスマン・トルコの時代に隆盛を極め、モスクや宮殿を飾り、絵皿や器は宮殿で愛用されてきた。

紀元前18世紀頃の古代ヒッタイト帝国の首都、ハットウシャシュに到着。

風雨が激しい中、びしょぬれになりながら、今から4千年前の岩に刻まれた壁画や、当時の街並みの土台、街を守るライオンの像などを見て、当時の城壁を登る。ヒッタイト人は初めて鉄器を使用し、この地で約1千年間も栄え、エジプトのラムセス2世との「平和条約の書簡」の粘土板が発見されているという。

夕方、アンカラ（人口373万人）に到着、駅のレストランで夕食。首都の駅にしては意外に簡素だった。隣で食事をしているのは日本人の学生のグループで、この時期は、日本人や中国人の観光客が特に多いという。ヨーロッパからのお客は、ドイツ人、イタリア人、フランス人、ロシア人などで、避暑をかねて1週間、10日間と滞在するという。またトルコ人も、夏は別荘やペンション、テントなどで避暑を過ごす習慣がある。忙しく各地を駆け回るのは日本人や中国人ということらしい。

アンカラエクスプレスはイスタンブールとアンカラのトルコ2大都市を結ぶ寝台夜行列車で、約458kmを約9時間かけて走る。車内は、2段ベッドになっている個室形式で、音はうるさいが、大変快適。ただ時間通りには到着しないらしく、大体1時間か1時間半は遅れるのが普通とのことだが、一応、定刻に着くということを想定して、朝食は、5時半とは驚いた。何が出るだろうと少し期待したが、いたってシンプル。

第7日目（2月22日 晴れ）

朝、きれいなイスタンブールの港を見ながら、アガサ・クリステイの小説にも登場するオリエント急行のヨーロッパの東のはずれの駅シルケジに到着、古代からの東西の文明の十字路であるイスタンブールに向かう。ボスフォラス海峡にかかる第2大橋（石川島播磨重工が建設）を通過して、ヨーロッパ側に向かう。イスタンブールは大変な交通渋滞で、今、新しく大成建設が海底トンネルを建設中とのことだが、当然のことながら、遺跡が次々と

出て工事は遅れているという。

イスタンブールは、トルコ最大の都市で、人口1200万人。千数百年もの間、ビザンツ（東ローマ帝国、395年から1453年）、オスマン・トルコ（1453年から1922年）の都として栄えたところ。私たちは、最初に、イスタンブール最大の巨大市場のグラド・バザールに行く。トルコ語で、カパル・チャルシュ（屋根つき市場）とよばれ、全体が屋根で覆われた屋内の商店街である。広い敷地に大小無数の通路が交わり、バザールには4000を超える店がひしめき合っている。貴金属、絨毯、皮革製品、陶器、衣類などありとあらゆるものが売られている。その中で、特に目を引いたのは、目の形をした青いガラス玉の魔よけのナザールボンジュ、災難よけに身につけたり、部屋に飾ったり、交通事故のお守りとしてつかわれている。同じ品物でも店によって値が違い、値切りの駆け引きを楽しむという。しかし、私たちは、時間がなく残念だった。その後トプカプ宮殿に向かう。

トプカプ宮殿は、イスタンブール旧市内にある半島の先端部分にあり、3方を、ボスボラス海峡、マルマラ海、金角湾に囲まれた丘に位置する。私たちは、ボスフォラス海峡を見渡すレストランで昼食。ここは、イスタンブールを征服したメフメット2世により1460年に着工され、歴代のスルタンが増築しながら約400年以上、その居城としたもの。広大な敷地内は4つの庭園に分かれ、議会、スルタンの居室、ハレムなどが保存され、博物館として、当時の栄華を偲ばせている。「宝物館」には4つの部屋があり、財宝、陶磁器、甲冑、衣装などがテーマ毎に展示されている。3つの大きなエメラルドの「トプカプの短剣」、重さ3kgの「世界最大のエメラルド」86カラットのダイヤモンドの「スプーン屋のダイヤモンド」など目を見張るような宝石類などが展示されていた。陶器のコレクションも見事だった。ハレムはアラビア語で「禁断」の意で妻や女性たちが住んでいたところで、400もの部屋から構成されている。

その後、ガラタ橋の近くにあるエジプト・バザールは、生活の匂いのする庶民的な市場である。スパイスや珍しい香辛料の買い物を楽しむ。バザール前の広場では、大きなトルコ国旗を売っている老人がいたが、トルコ人は国旗に非常な誇りと親しみを持っており、いつでもどこにでも、国旗が掲揚されている。

夕食後、夜の街に向かおうとタクシーに乗るが、乱暴な運転にはひやひやした。ライトアップされているブルーモスクやアヤ・ソフィアは、昼とは違い、黄金色に輝き威風を放っていた。路上には、焼き栗やお茶（チャイ）を売る屋台が並ぶ、夏ならば、水売り屋がいるらしい。帰りはトラム（路面電車）に乗ってみたが、そこでは、トルコの青年が流暢な日本語で話しかけてきた。彼もアンカラ大学日本語科を卒業、今は、韓国にある「マツモトキヨシ」から「冷えピタ」を輸入して、商売していると云い、「自分はあまり熱心にお祈りをしないが、母は一日に7回もお祈りをしている」という。

第8日目（2月23日 晴れ）

いよいよ今日が、トルコの最後の日となった。朝食後、旧市街と新市街を結ぶガラタ橋を渡る。橋の両側の歩道には釣り竿を構えて釣りを楽しんでいる人がズラリと並んでいるが、「こんなに釣れたぞ、見てくれ」と、とても人懐っこい。覗くと、小さな鯛と小さな鯉が数匹ずつ入っていた。

その後、「世界1短い地下鉄」に乗ったが、それは、百年前に造られ、世界で2番目に古く、3分で573mを走りぬける。1910年頃までは、馬を使って動かしていたというから驚き。駅舎は、当時のままで、壁面のタイルには当時の街の様子が描かれている。

降りると、駅前では、スミット（ごまをまぶしたドーナツ型のパン）を棒に刺して売る屋台があり、「カチパラ？」（いくら？）と言って、人が寄って来ていた。そこから少し右手に上がると、各国の大使館もある一画に出る。昔の落ち着いた坂のある街並みで、そこを可愛い赤いトラム（路面電車）が走っていた。商店街は風格があり、夜はイルミネーションが灯されているようだった。

ボスポラス海峡クルーズの観光船は、ガラタ橋のそばの棧橋から出た。定員400人の大型船で、今日は貸し切りだが、船長は、「これには日本の小泉元首相や自民党の森さんも乗ったのだよ」と写真を見せてくれた。黒海の方に向い、第2ボスポラス大橋まで行って引き返してきました。途中、乙女の塔やオスマン帝国がコンスタンティノープル攻略の時の城塞や大金持ちの別荘などを見る。昼食後、ブルーモスクとアヤ・ソフィアの観光に向かう。

ブルーモスクとは、スルタン・アフメット・ジャミイと呼ばれるアフメット1世が1616年に建てたイスラムの寺院で、内部の壁や柱が青いタイルを基調としているので、そう呼ばれている。6本のミナレット（1日5回のお祈りの時を告げるための尖塔）を持つのは、メッカ以外ではここだけといわれている。メッカの方向にむかって祈りをささげている人たちもいた。

アヤ・ソフィアは、ローマ帝国時代に建造されたギリシャ正教の総本山であり、ビザンチン建築の最高傑作といわれている。1453年オスマン・トルコによりコンスタンチノープルが陥落すると、メフメット2世によりこの大聖堂はイスラム教のモスクに改造され、聖堂内のモザイク画の聖像は漆喰で塗り込められ、その外側にはミナレットも建てられた。1931年に、漆喰の下のモザイク画が発見されて、キリストなどの聖像が復元され、博物館として公開されている。

午後、空港に向かい、帰国の途に就く。偏西風に乗って、約11時間で成田に到着。

数千年の時をかけ巡る旅、エーゲ海からトルコの中央高原への3千Kmの旅。5千年前からの遺跡がいたるところにあり、人間の歴史の重みと哀しさを今に伝えている。パソコン上にも3万3000通の紀行文が寄せられている。日本人にとっては誰もが行きたい土地ではないかと思う。私たちの旅行もトルコ西部のほんの一部だけであった。又機会があれば行きたいと思っている。